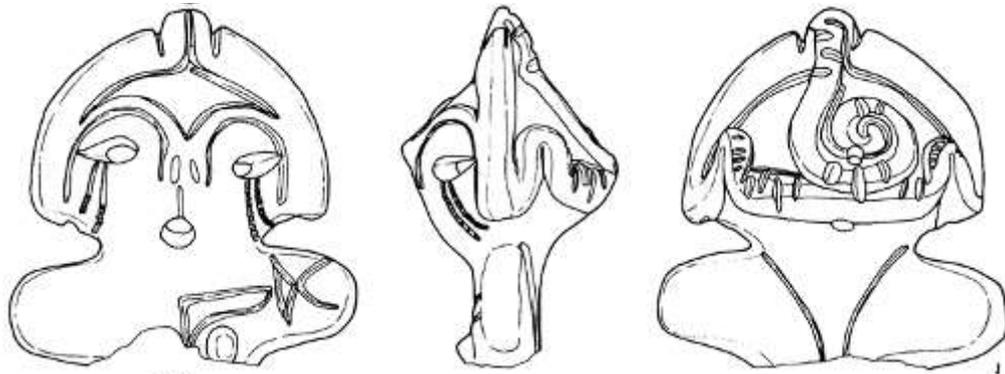


令和6年度 第5回考古学講座

令和6年11月30日（土）

かながわ県民センター 2階ホール

土偶を考える



山梨県一の沢遺跡出土土偶（山梨県教育委員会1986）

厚木市産業文化スポーツ部

文化魅力創造課

佐藤 健二

はじめに

土偶は粘土をヒト形に造形し、焼き上げられたもので、草創期から晩期に至るまで、1 万年以上の長きにわたって続いた縄文時代を代表する遺物の一つです。そして、土偶は縄文時代が終わった後にも、一部では弥生時代まで引き継がれていました。

土偶は古くから多くの人々の関心を集め、研究が重ねられてきました。また、その表情やフォルムから鑑賞の対象として、時には地域のマスコットとして、多くの人に愛されています。

土偶は縄文時代の人々の信仰や祈りといった精神文化に関わる役割を持った道具と考えられています。形として残らない縄文時代の精神に現代の私たちが迫るのは困難なことです。縄文時代の人々が土偶に託した思いの一部は、土偶の造形などから垣間見ることができるのではないのでしょうか。また、土偶の中身は極めて精巧に作られたものも多く、豊かな自然の中で暮らす縄文時代の人々が、高度な技術や芸術性を備えていたことを窺い知ることができます。

土偶と埴輪

土偶と埴輪は、考古資料の代表的なものとして並び称され、混同されることがありますが、全くの別物です。土偶と埴輪の違いについて、簡単におさらいしておきます。

土偶



厚木市2024から転載

作られた時代 縄文時代（約16,000年～2,500年前）

出土する場所 ムラ

性別 ほとんどは女性

役割 祈りの道具

埴輪



作られた時代 古墳時代（3世紀～6世紀、約1,700～1,400年前）

出土する場所 古墳

性別 男性と女性両方。道具や動物、建物もある。

役割 古墳に並べ、物語を伝える。

土偶は縄文時代に作られたもので、縄文時代の人々の信仰や儀礼など、精神文化を支えるための祈りの道具として使われていたと考えられます。

埴輪は古墳時代に作られたもので、古墳（有力者の墓）の上に並べられ、古墳を装飾したり、古墳の被葬者に関わる物語の情景を再現したと考えられます。土偶は手に持って運ぶことができるサイズですが、埴輪は古墳に据え置くことを前提として作られているので、大形で持ち運びには適していません。

土偶のうつり変わり

1 万年以上もの長きにわたる縄文時代を通じて、土偶は決して一様だったわけではなく、形状や文様は変化を遂げ、その時々文化を反映しながら縄文時代の人々の精神文化を支える道具として用いられてきたものと考えられます。

(1) 土偶の出現

土偶の出現は縄文時代草創期に遡ります。出現期の土偶は顔や四肢の表現が未発達で、文様が施されることもあまりありませんが、胴部には乳房状の表現が見られ、女性をモデルにしていることが窺われます。

縄文時代前期以降になると、土偶の事例は次第に増えてきます。前期の土偶は平板上のものが多く、まだ顔の表現は不明瞭ですが、頭部に円孔が施され、目や耳を表現していると思われるものが見られます。胴部の中央が強く括れ、腰を表現しているものと考えられます。

(2) 土偶の発展

縄文時代中期になると土偶は立体的になり、目や口、鼻など顔の表現もハッキリとしてきます。また、文様も多く施されるようになり、大形のものも出現してきます。しかし、中期後半になると土偶は小形のものが多くなり、脚の表現が簡素化し、座ったような状態のものが多くなります。

縄文時代後期から晩期になると、再び立体感のある土偶が多く見られるようになり、やや大形化した中空土偶も作られるようになります。後期以降の土偶には精巧に作られたものも多く、高い技術力も窺われます。また、後期の土偶には仮面をつけているような様子が表現されているものが見られます。

後期の前半には手足の表現が無く、中空の胴部に顔が付いた筒形土偶が出現するのも特徴の一つです。

(3) 土偶の終焉

縄文時代を通じて発展し、縄文時代の人々によって作られ、使われ続けてきた土偶は、縄文時代の終焉とともに急に姿を消していきます。

しかしながら、土偶は弥生時代の遺跡からもわずかながら出土していることから、土偶文化は弥生時代にも引き継がれていたことが分かります。

また、弥生時代になると、頭頂部に穴が開き、内部が空洞となる容器形の土偶が見られるようになります。容器形土偶は縄文土偶の伝統を受け継ぎながらも、幼児骨の収納容器というこれまでの土偶に無かった役割を持ち、土偶の役割が弥生時代になると変わってきていることが窺われます。そして、弥生時代の中期を最後に土偶は作られなくなり、その姿を完全に消していきます。

土偶の不思議

一見してヒト形と分かる土偶の存在は、不思議なものとして古くから注目され、多くの人々の関心を集めてきました。その表現は時にリアルでもあり、縄文時代の人々に対する想像力を掻き立てられるものがあります。

土偶は狩猟や採集のための道具や、材料を加工するための道具のような、日常生活と直接的な関わりを持つ実用的な道具ではなく、縄文時代の人々が持つ宗教観や世界観などに基づく精神文化と深く関わりのある非実用的な道具と考えられます。

豊かな自然の中で暮らす縄文時代の人々は、人知の及ばない自然の力に対して感謝や畏怖を抱きながら、独自の精神文化を形成していたと考えられ、土偶はそれらの精神文化の上に成り立っているものといえます。しかしながら、現代の私たちが縄文時代の精神文化を理解するのは困難なことでしょう。

土偶は壊されたのか

遺跡から出土する土偶の多くはバラバラの状態であり、完全な形の土偶が出土するのは極めて稀なことです。山梨県の釈迦堂遺跡では1116点もの土偶が出土していますが、頭部から足までの全容が明らかになる土偶はわずか1点しかないようです。

頭部だけ、腕だけなど、身体の一部しか見つからないという土偶の出土状況の特殊性は、大きな関心を集めてきました。一つの解釈として、土偶は病気やケガの回復を願い、身代わりにするためにわざと壊されたという説があります。一方で、わざと壊したのではなく、使用の結果、壊れたのだという説もあります。

土偶はバラバラの状態で捨てられていることが多いようですが、中には埋葬するかのように穴を掘って埋められたものもあります。

土偶への祈り

縄文時代の人々が、土偶に様々な祈りを込めていたであろうことは、想像に難くありません。山梨県の釈迦堂遺跡から出土した土偶には、出産の情景を表現していると考えられるものがあります。医学が未発達な社会で出産は死と隣り合わせであり、そこには安産と子孫繁栄に対する必死な祈りが込められているように思われます。

東京都の檜原遺跡から出土した円錐形土偶には、内部に土製の玉が入っており、妊婦を形どるとともに楽器である土鈴としての役割も備えていることから、安産や子孫繁栄を祈る儀式で使われたという解釈もあります。

また、釈迦堂遺跡出土土偶には壺を脇に抱えているものがあります。壺を抱える土偶の事例は中部地方を中心に散見しており、豊かな食に対する祈りが込められているようにも思われます。

縄文時代の人々が土偶に込めた祈りは一様ではなく、様々な場面で、様々な祈りが込められていたのでしょう。

土偶からみた縄文人の装いとしぐさ

土偶が神や精霊、人を表現しているのか、実際のところはよく分かりませんが、縄文時代の人々をモデルにして作られていることは間違いないと思われます。土偶に施された表現を見ると、髪形や装飾、服装など、縄文時代の人々の様子を垣間見ることができます。

土偶には耳飾りや首飾りなどの装飾品を身に着けている表現がされており、縄文時代の人々は結構オシャレだったことが分かります。また、顔面には入れ墨と思われる表現のあるものも見られ、縄文時代には入れ墨の風習があったことが推定されます。

東京都の宮田遺跡出土土偶は、子供を抱きかかえる姿が表現されています。山梨県の鋳物師屋遺跡出土の円錐形土偶は、妊婦がおなかに手を添えているようなしぐさが表現されており、母親の子に対する愛情が窺われます。

(1) 耳飾り

土偶の中には、頭部の両脇に耳飾りの装着を表現していると考えられるものが見られます。縄文時代の耳飾りは早期に出現しますが、後期から晩期にかけて大きく発展し、大形のものを作られるようになります。大形化に伴って、耳飾りには様々な文様や彫刻が施されたものが見られるようになり、土偶が装着する耳飾りにも、文様が表現されているものが見られます。山梨県の中谷遺跡出土土偶には、細かな刺突が一周巡っており、耳飾りの文様を表現したものと考えられます。

土製耳飾りには、大きく分けて小形、中形、大形と大きさに3種類の規格があり、小さなものから段階を経て徐々に大きなものを装着したものと考えられます。耳飾りの装着は、身体を美しく飾る装飾であるとともに、成人や婚姻などに伴う通過儀礼的な意味も兼ね備えていたものと考えられます。

(2) 入れ墨

土偶の顔面には文様の描かれているものがあり、これは入れ墨を表現したものだと考えられます。苦痛を伴う入れ墨は、成人などの通過儀礼や、その人の出自や立場、役割などを表すために施された可能性があります。

(3) 髪形

土偶の頭部には髪形を表現したと思われるものが見受けられます。山梨県の釈迦堂遺跡出土土偶では、髪の毛を真ん中で分けて、後頭部で結わいている様子が表現されているものがあります。結髪する土偶の事例は数多く見られ、縄文時代の人々の髪形について考えるヒントになります。

土偶の仲間たち

土偶は粘土を材料としたヒト形の土製品ですが、粘土以外の材料を用いたものも知られています。石を材料とした岩偶、動物の骨や角を材料とした骨格偶などがありますが、土偶と比較すると出土事例は非常に少なく、粘土を主な材料として、ヒト形の土製品である土偶を作り、祈りを込めていたのでしょう。木を材料とした木偶の存在も想定されますが、これまでに木偶が発見された事例はほとんどないようです。

また、土偶のようにヒトの形はしていないものの、土偶と同様の役割を持つと考えられる道具として、土版や岩版があります。土版や岩版は円形や長方形のものが多く、土偶と共通した文様が施されており、中には人面が表現されているものもあります。

その他に、イノシシやサル、トリなど、様々な動物を模した土製品も作られており、自然と密接に暮らす縄文時代の人々の暮らしを垣間見ることができます。

土偶と土器

縄文土器の中には、土偶と共通した人面や人体の装飾が施されたものが見られます。土偶と土器の人面装飾はよく似ており、両者の間には共通したテーマがあるようにも思われます。

土器に人面や人体の装飾が施されるのは、縄文時代前期に起源が求められますが、中期中葉以降に多くの事例が認められるようになります。大きく分けて、土器の口縁部に把手として人面装飾が施される人面把手と、土器の胴部に人面や人体の装飾が施されたものがあります。人面把手の多くは顔がクローズアップされて表現されていますが、大日野原遺跡の事例は胴部や手も伴う土偶が付帯する珍しい事例です。

林王子遺跡出土の有孔鏝付土器に見られるような人体装飾は、ほとんどが三本指の手を上方に広げており、土偶とは異なる手の表現が特徴的です。

土偶の少ない神奈川県

土偶は縄文時代を代表する遺物の一つですが、神奈川県内から出土している土偶は、近隣の都県と比べると少ない傾向にあります。

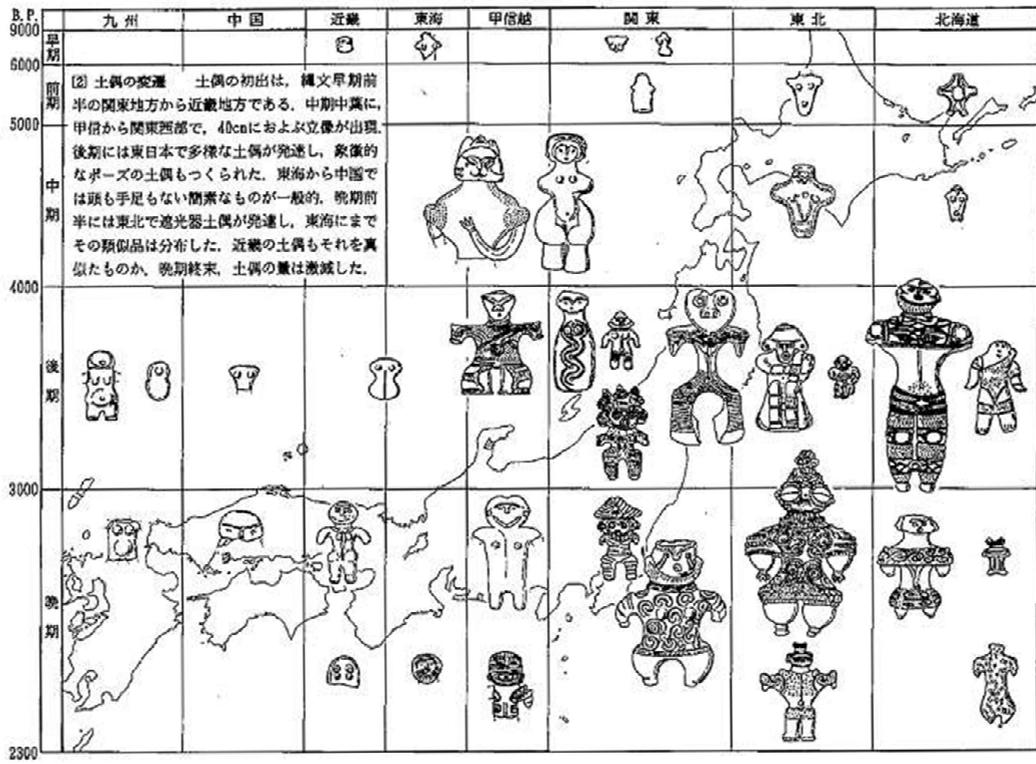
国立歴史博物館が主体となって全国の土偶を集成したデータ（国立歴史民俗博物館1992）によると、1992年の時点で神奈川県では48遺跡から155点の土偶が出土しています。近隣の東京都373点、埼玉県217点、千葉県788点と比較すると少々さみしい印象を受けます。西隣の山梨県1499点、また長野県の1167点と比較すると、その差は歴然としています。

その後30年以上が経過して、調査事例が増加するとともに土偶の出土事例も増加しており、2020年に公開された千葉毅氏の集成(※1)によれば、神奈川県内の出土土偶は126遺跡584点と4倍近くに増加しています。しかしながら、他県でも同様に調査事例は増加しています。長野県立歴史博物館で公開している長野県内出土土偶のデータベース(※2)によると、582遺跡から3948点の土偶の出土が報告されており、むしろ差は開いてしまいました。

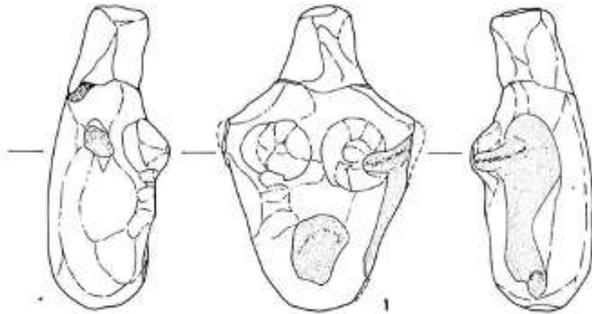
まだまだ未発見の土偶が数多く眠っている可能性はありますが、今後他の地域を圧倒するような土偶が出土する可能性は高くないと考えられ、土偶の分布が少ないというのは、神奈川県の特徴ともいえます。縄文時代の遺跡が数多くあるにもかかわらず、縄文時代を代表する土偶の出土事例が少ないというのは大きな謎です。

(※1)「かながわ土偶マップ on GoogleMaps」https://researchmap.jp/tsuyoshi_chiba 但し千葉氏の集成には顔面把手や人面装飾も含まれるので、土偶の実数はもっと少なくなる。

(※2)「長野県内出土土偶」<https://www.npmh.net/dogu/>



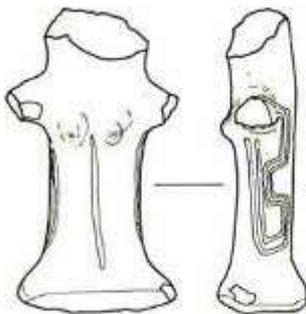
土偶の変遷 日本第四紀学会ほか編1992



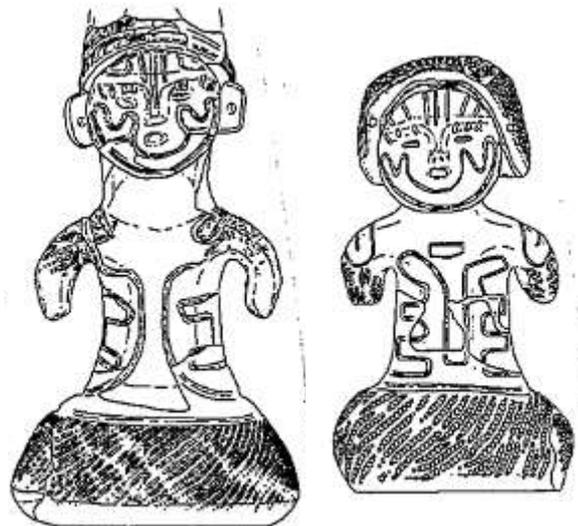
草創期の土偶 (粥見井尻遺跡) 三重県埋蔵文化財センター1997



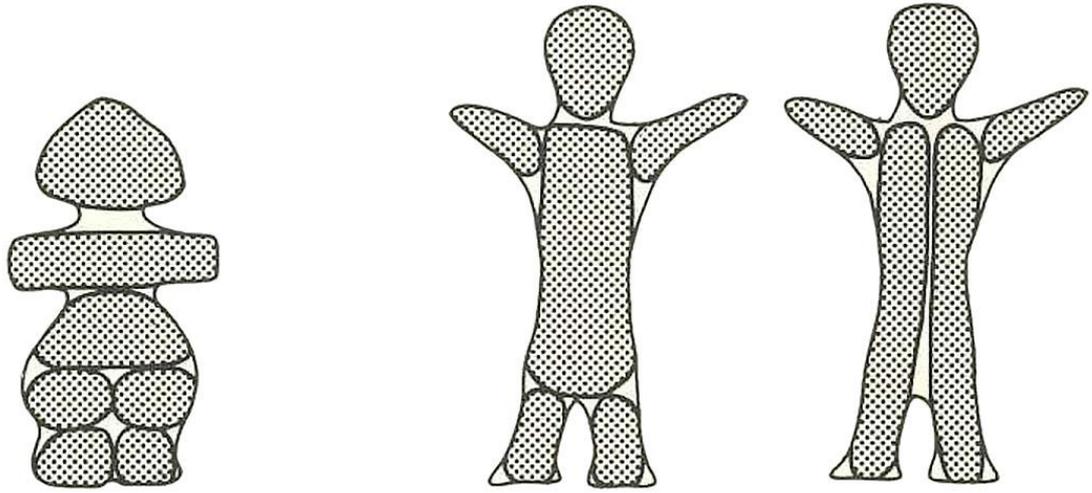
前期の土偶 (釈迦堂遺跡) 山梨県教育委員会1986



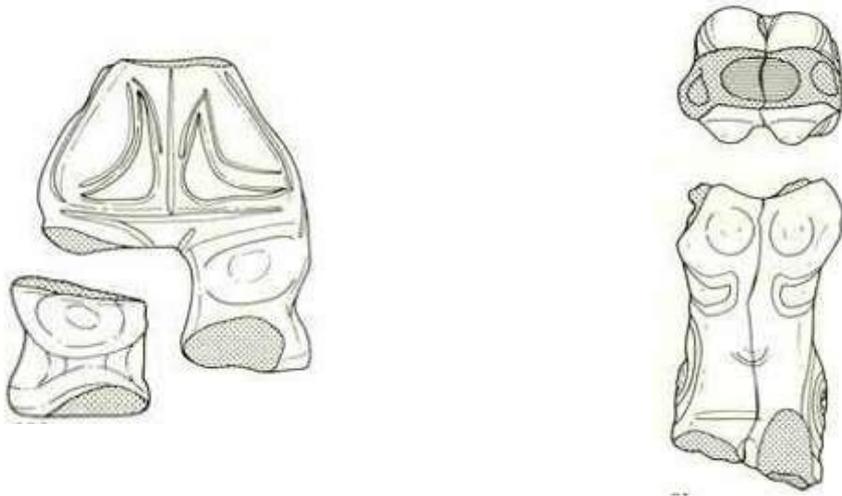
弥生時代の土偶 (金の尾遺跡) 山梨県教育委員会1987



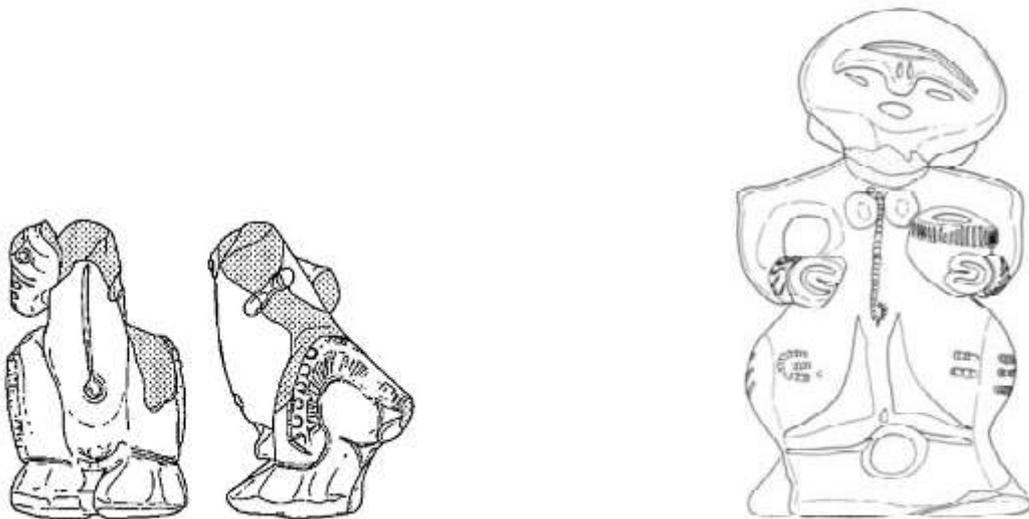
弥生時代の容器形土偶 (岡遺跡) 野沢1984



土偶の作り方（中期の例） 山梨県教育委員会1986を元に作成

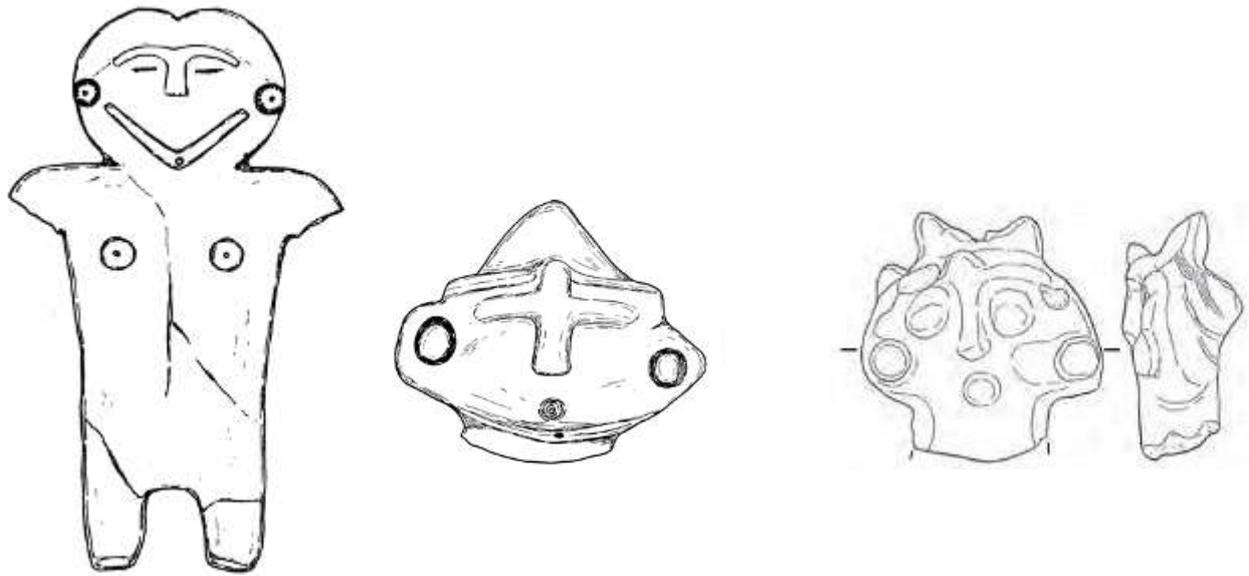


接合部分が割れた土偶（右・左：釈迦堂遺跡） 山梨県教育委員会1987

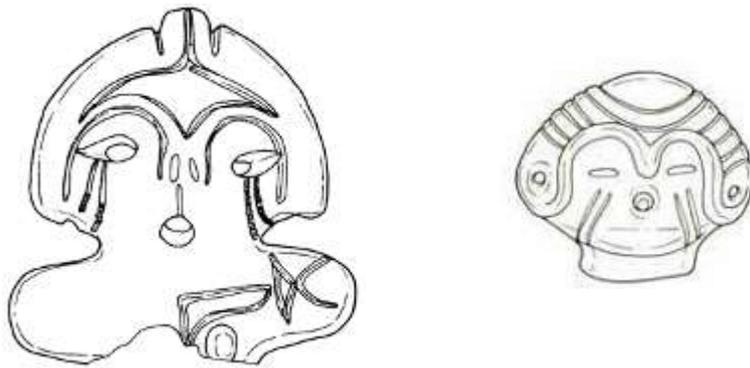


出産する土偶（釈迦堂遺跡） 山梨県教育委員会1986

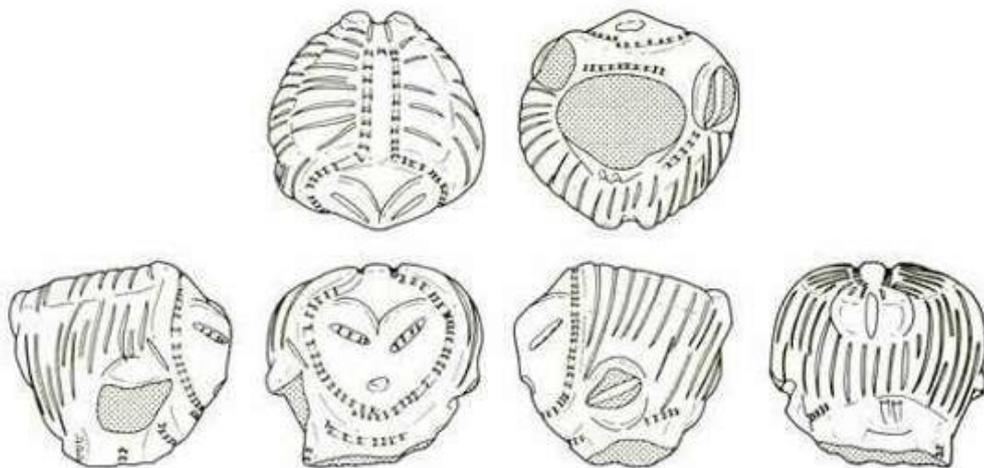
壺を抱える土偶（目切遺跡） 岡谷市教育委員会2005



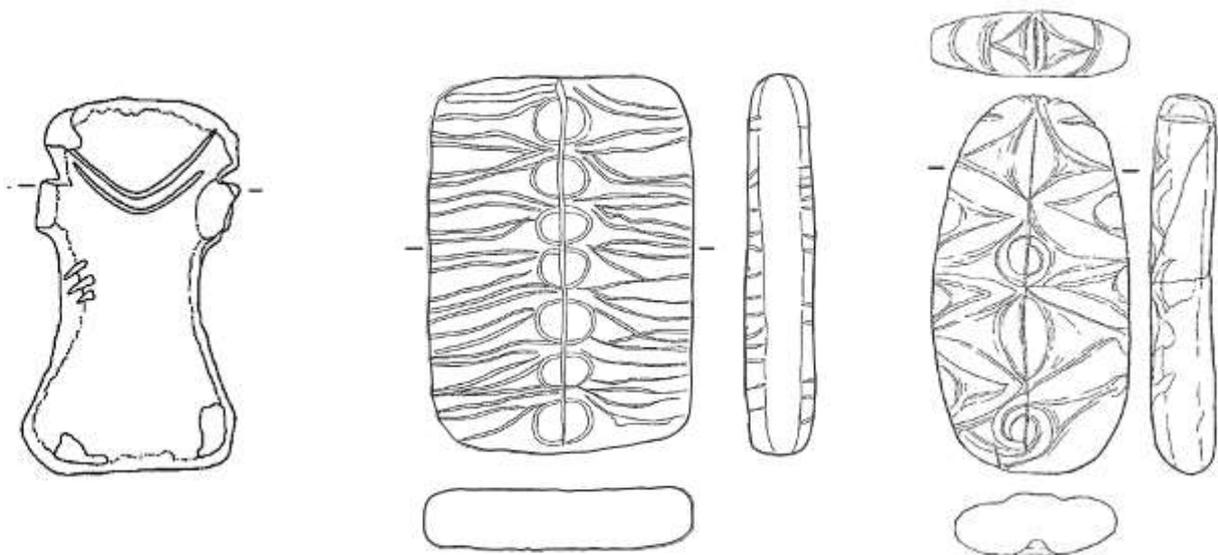
耳飾りを着けた土偶（左・中：中谷遺跡、右：茅野遺跡） 都留市教育委員会1973、榛東村教育委員会2021



入れ墨の施された土偶（左：一の沢遺跡、右：釈迦堂遺跡） 山梨県教育委員会1986、1987



髪形に分かる土偶（釈迦堂遺跡） 山梨県教育委員会1987



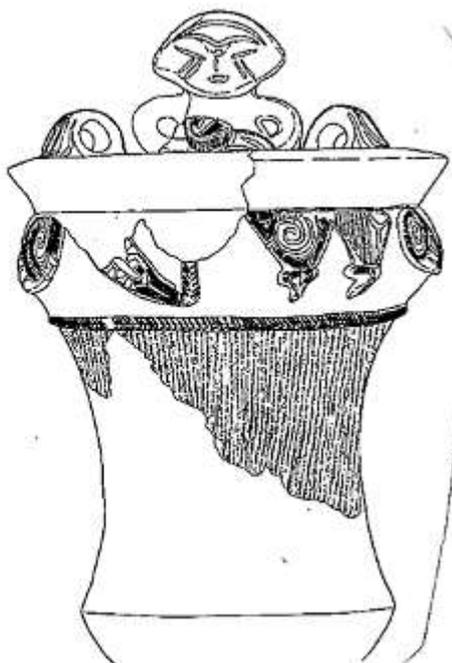
岩偶（大熊仲町遺跡）（財）横浜市ふるさと 土版（茅野遺跡） 榛東村教育委員会2021 岩版（茅野遺跡） 榛東村教育委員会2021
歴史財団1995



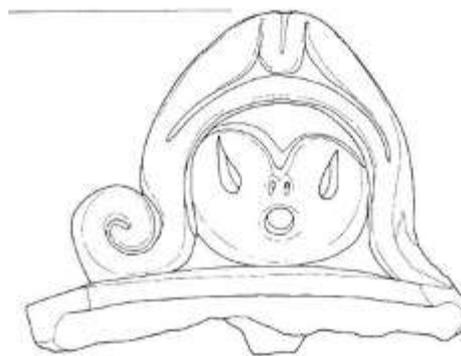
鳥形土製品（釈迦堂遺跡） 厚木市2024から転載



動物形土製品（川尻中村遺跡） 厚木市2024から転載



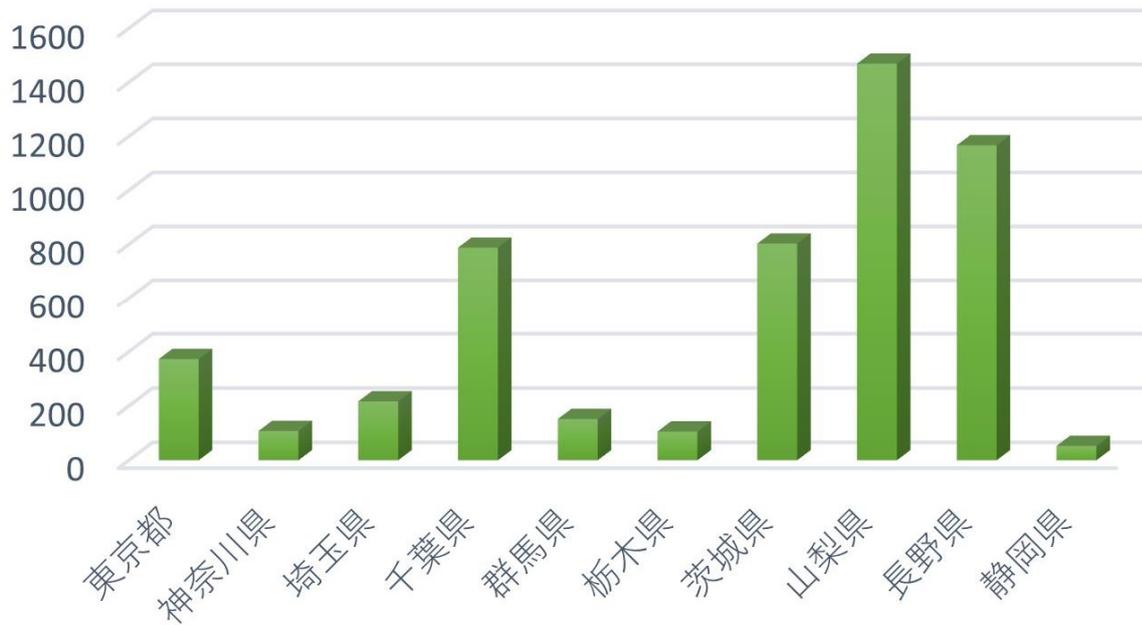
土偶裝飾付土器（大日野原遺跡） 相模原市立博物館2019



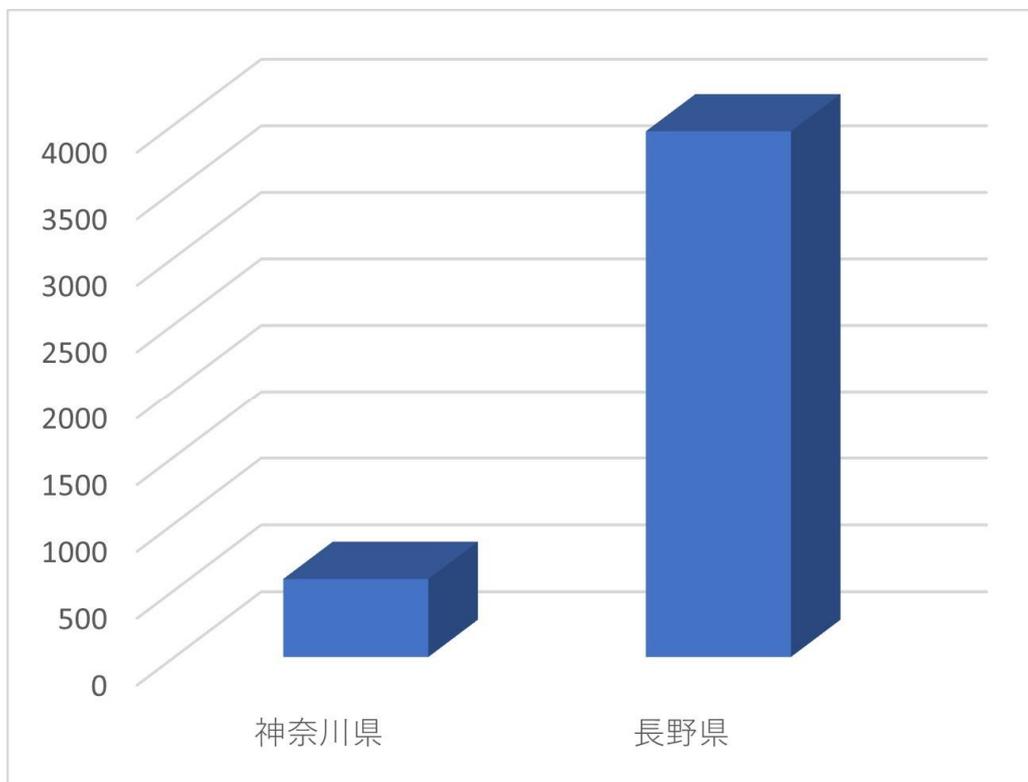
人面把手（恩名沖原遺跡） 玉川文化財研究所2000



人面把手（太岳院遺跡） 玉川文化財研究所2011



都県別土偶出土点数 国立歴史民俗博物館1992を元に作成



神奈川県と長野県の土偶出土点数比較 「かながわ土偶マップ on GoogleMaps」 https://researchmap.jp/tsuyoshi_chiba、「長野県内出土土偶」 <https://www.npmh.net/dogu/> を元に作成

<参考文献>

- 厚木市 2024 『あつぎ郷土博物館令和6年度特別展「ドグウ集まれ！」展示図録』
- 江坂輝彌・野口義麿 1974 『古代史発掘3 土偶芸術と信仰』講談社
- 小野美千代・江坂輝彌 1984 『土偶の知識』考古学シリーズ18、東京美術
- 金成南海子・宮尾 亨 1996 「土製耳飾りの直径」『國學院大學考古学資料館紀要』第12輯
- 小林達雄編 1988 『古代史復元3 縄文人の道具』講談社
- 九州国立博物館監修 2019 『縄文王国やまなし』求龍堂
- 国立歴史民俗博物館 1992 『国立歴史民俗博物館研究報告』第37集 土偶とその情報
- 日本第四紀学会・小野 昭・春成秀爾・小田静夫編 1992 『図解・日本の人類遺跡』東京大学出版会
- 野沢昌康 1984 「甲斐・岡遺跡出土の容器形土偶」『山梨考古』第14号
- 原田昌幸 2010a 『日本の美術』No.526土偶とその周辺Ⅰ（縄文草創期～中期）、ぎょうせい
- 原田昌幸 2010b 『日本の美術』No.527土偶とその周辺Ⅱ（縄文後期～晩期）、ぎょうせい
- 文化庁ほか編 2009 『国宝土偶展』NHK、NHKプロモーション、毎日新聞社
- 三上徹也 2014 『縄文土偶ガイドブック—縄文土偶の世界—』新泉社
- MIHO MUSEUM編 2012 『土偶・コスモス』羽鳥書店
- 望月昭秀編 2023 『土偶を読むを読む』文学通信
- 山梨県教育委員会 1986 『釈迦堂Ⅰ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第17集